

【ランニングマシン！！】

[迫り来る法改正と時代変化の荒波-49]

<[SMGレポート 3003] 序文>

マグニチュード9.0の巨大地震が、東北地方の東沿岸部を襲った丁度その年、米国でも、同じ東海岸から、やがて世界を震撼させることになる激震の第一波が、解き放たれようとしていました。マサチューセッツ工科大学スローン・スクール、デジタル・ビジネス・センターの研究者2人（A・マカフィーとE・ブリニョルフソン）の著した「機械との競争」という一冊の自費出版本-----。その中に、次の様な一節がありました。

「…雇用が米国や日本から中国に移ったのではない。雇用が全ての国からロボットに移った、というのが正しい。デジタル革命や機械との競争は、生産の海外移転より、もっと重要な論点とならなければならない」---

それまで先進各国では、それぞれ温度差はあれ、「失われた雇用」について、景気循環論を唱える者や需要不足を説く者、技術革新の停滞＝経済を進歩させる新しい強力な発想が生まれていない事＝が原因とする声等が大勢を占めていましたが、MITの二人の研究者の主張は「これからはデジタル革命の後半戦。飛躍的に能力を拡大していくコンピュータに人間はますます仕事を奪われる」というものでした。

この二人の言説こそが、「ITにより、人間の働く場がなくなる」「AIが殆どの分野で人間にとって代わり、裁判官すら不要になる。人間に残されるのは、介護や医療という対人密着型サービスか、不条理な世界を描き出す小説ぐらいしかない」「もし多くの国民がIT化の波に呑み込まれ、仕事を失うケースが続出する様なら、失業給付や生活保護、医療扶助、子供の養育手当等の個別対策的な保証を整理一元化し、国民一人一人に現金を給付して最低限度の生活を保障する生存権保証政策＝ベーシックインカム＝も視野に置くべきではないか」等、最近、にわかに現実味を帯び始めた「コンピュータに制御・支配される近未来図」議論、のそもそもの始まりであり、いわゆるIT恐慌の火付け役なのです。

振り返ってみれば、二人の分析と洞察（読み）＝近未来の予測＝は、遺憾ながら驚くほど正鵠を射たものであり、身震いするほど情け容赦のないものであったと云わざるを得ません。そして今、その予測をまるでトレースするかの様に日本で起こり若しくは起こり始めている激しい変化の予兆…私達が足場を置いているこの時代、の移り変わりは、立止っていれば忽ち置き去りにされ、必死に駆け続けないと、アツという間に後方に振り落とされてしまう「ランニングマシン」そのものであり、それは恰も、見えない闇への恐怖から、その心に鬼や夜叉が棲みついてしまった平安人同様、私達を是からずっと、底の見えない深い不安の淵に立たせ続けるのではないかと-----。本文では、いよいよ今年度から本格的な幕開けを迎える「IT恐慌」（序章）について、触れてみようと思います。